

制作概要

足下の小さな虫から肉眼では見えない微生物の存在を想像し、大地が無数の生命の集まりであることに気づいた時、私の中で生命がはっきりしたイメージを持ち始め作品テーマとなった。細胞の集合体である人間の身体や星々が生死のリズムを刻む宇宙まで、イメージをミクロとマクロの世界に行き来させながら生命を捉えている。素材、技法に関してはこの数年、羊毛で作ったフェルトを裁断して小さなパーツを作り、繊維の断面が見えるようにパーツをつなぎ合わせて作品全体を創り上げている。表現の要素であるイメージ、テーマ、素材、技法はどれが先行すると決まっているのではなく、絡まり合いながら育っている。

今回の作品「波動」は、「布の記憶／糸の時間 日中交流展」のために制作したものである。制作は、展覧会のタイトルにあるように、改めて布や糸、即ち素材である繊維を考える機会となった。悠久の時を人間に寄り添うように存在し、触覚を通して私たちの深い記憶に刻まれている繊維。私はこの繊維が持つしなやかさと静かな強さそして存在感に惹かれる。繊維はフェルトになっても、けっして一本一本の存在は変わらない。作品では繊維の束が断面として現れ、近づいた時には一本一本の存在がはっきりと確認できる。細部に全体と同じ存在感があり、全体がさらに大きなものの存在を予感させる作品を制作したい。

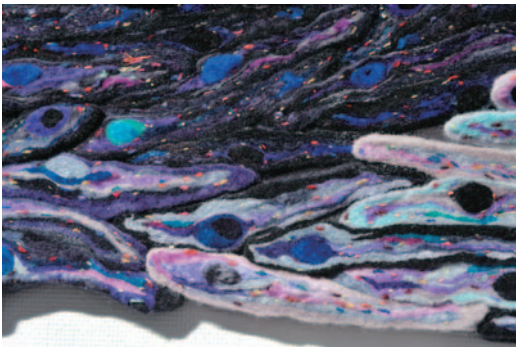
なお「布の記憶／糸の時間 日中交流展」は、日本側出品者5名が実行委員として立ち上げ、中国側から4名が出品して、京都芸術センターの共催で2009年6月13日から7月5日まで開催した。前年12月には中国天津美術学院で日本側5名と中国各地から27名が出品し「布的記憶／絲的時間 中日繊維芸術交流展」を開催し、テキスタイルを通じて国際交流を行っている。

六村 眞規子

「波動」

布の記憶 / 糸の時間 日中交流展

京都芸術センター



羊毛を染色し、縮絨させてできたフェルト板をスライスして
ピースをつくり、断面が見えるように貼り合わせる
繊維の束が現れる

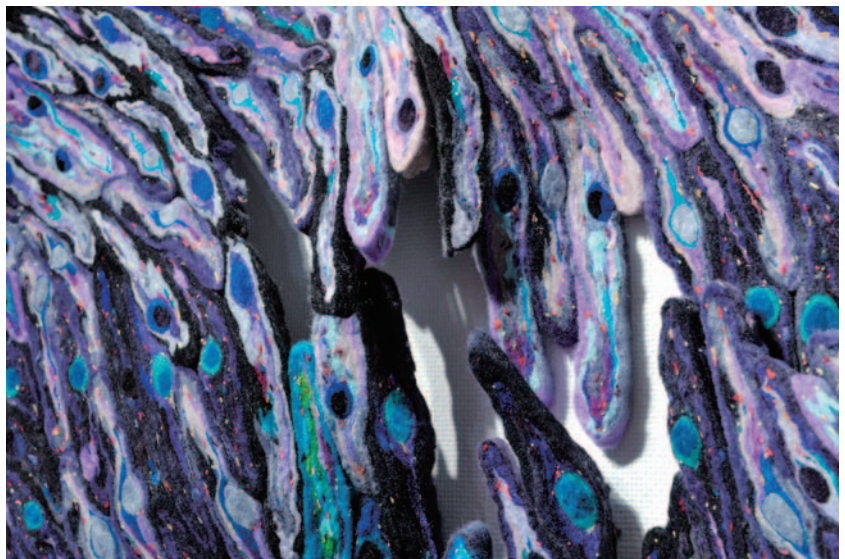


白い壁の表に湧き出てきたように設置する
その奥には大きなうねりが存在するように
作品全体もまた大きな存在の部分であるように

細部に輝く生命を見るような存在感が欲しい
繊維一本一本のしなやかに強い存在感を求めて



各々のフェルトのピースには細胞の核のように丸い形が見える
全てのピースが存在を主張し、それを追う視線が動き続ける
眼で触れているように
視覚が触覚を呼び覚ます





六村 眞規子

— 波動 —

2009年 275(w)×300(h)×10(d)cm

羊毛、酸性染料、麻糸、反応染料、接着剤、不織布

布の記憶／糸の時間 日中交流展

京都芸術センター Electronic Library Service